東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

幼兒の教育

主幹
堀七藏

第二十五卷　二月號　第二號

幼稚園の使命……堀七藏
幼兒の口腔衛生について……金谷增
御挨拶……堀七藏
動作遊戯「あられ」……土川五郎
子の恩を知って……金子彦三郎
東京保育協會の設立……記者
重心を利用した玩具の作り方……藤五代策
眩惑……土川五郎
東京市保育會の近況……記者
長編小說『兼ちゃん』……岡田美津

東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

幼兒の教育

主幹
堀　七　藏

第二十五卷　1925　第二號

日本幼稚園協會編輯幼兒の教育

會長　東京女子高等師範學校校長　茨木清次郎

主幹　東京女子高等師範學校教授　堀七藏

贊助員

東京女子高師教授　嚴谷季雄
東京帝大醫科講師　乙竹岩造
東京高師教授　醫博　太田孝之
慶應大學教授　文博　大瀨甚太郎
東洋幼稚園長　醫博　唐澤光德
早蕨幼稚園長　岸邊福雄
帝國教育會會長　久留島武彥
東京高師教授　文博　澤柳政太郎
東京女子高師教授　佐々木秀一
東京女子高師教授　文博　下田次郎
東京女子高師教授　文學士　菅原教造
醫、文博　富士川游
東京市學務課長　藤井利譽
東京女子高師講師　藤五代策
長崎縣師範學校長　福士末之助
文博　谷本富

東洋大學教授　棚橋源太郎
東京女子師範學校長　田子一民
東京女子高師囑託　高島平三郎
帝國教育會理事　龍山義亮
松住高等學校長　土川五郎
京都帝大教授　野口援太郎
文博　乘杉嘉壽
醫博　野上俊夫
東京女子高師教授　田長弘
文博　倉橋惣三
東京帝大教授　松村武雄
奈良女子高師校長　文博　松本亦太郎
醫博　槇山榮次
奈良女高師附屬幼稚園主事　三田谷啓
東京高等學校長　森川正雄
東京帝大教授　湯原元一
日本女子大學長　文博　吉田熊次
安井哲子

第二十五卷　幼兒の教育　第二號

目次

幼稚園の使命……堀　七藏……三八
幼兒の口腔衛生について……金谷　增……四二
御挨拶……堀　七藏……四七
遊戯動作「あられ」……土川五郎……四八
子の思を知つて……金子彦三郎……五一
東京保育協會の設立……記者……五五
重心を利用した玩具の作り方……藤　五代策……六一
眩惑……土川五郎……六三
東京市保育會の近況……記者……六七
長編小說『兼ちゃん』……岡田美津……六八

幼稚園の使命

堀　七　藏

一

近頃度々「幼稚園へ子供を入れたらよいでせうか」といふ問に接するのであります。これは幼兒を持てる親達が先づ抱かれる疑問でありませう。只に幼兒を持てる親としての疑問のみではなく、多くの人々には「幼稚園は不用のもの、贅澤なるもの、强ひて幼兒を幼稚園に入園せしむる必要がない」と考へられる方もありませう。時には幼稚園關係者でも幼稚園の使命が何處にあるか明白に意識しない場合がありはしませぬか。私は玆に平素考へてゐる所を述べて、質問に答へると共に幼兒保育の當事者として互に覺醒する所がありたいと思ひます。

二

何といつても家庭は幼兒の敎育せらるべき處であります。母は幼兒を保育すべき天職を持ち、重大なる責任を帶びてゐるものであります。幼兒は生れてから成人して社會に活動するまでの準備は、家庭に於て主として母から受けるべきものであります。これは八ケましく議論するまでもなく、誰にも明白であるべき事柄であります。しかし人間が一人前として社會に活動し得るに至るまでの準備期は非常に長く、また準備すべき事項が非常に多いのでありますから、一切の準備が

到底家庭に於てのみ行はれ得ないことも、只母だけがこの準備に貢献するのみでは、甚だ不充分なることも亦明白であります。

三

人間以外の動物の如く發達程度の低きものでは、一個體として生活し得るまでの準備は簡單であり、本能的であり、その期間も短いから、僅かな親の保護だけですむのであります。けれども、この事は人間では到底不可能な注文であります。そこで小學校教育も、中等教育もまた專門的職業的の教育も必要となり、是等の教育を施す場所、即ち各種の學校が必要であり、之が準備教育を擔當して、親の代理をなす教師が必要となることは明白な事實で、今更こと〴〵しく述べるまでもないのであります。若しこの理論が正しく小學校が必要であれば、また中學校が必要なると同樣に、幼稚園も必要な筈であります。尤も小、中學校の教育は親に出來ない。また出來ても、之をその道に堪能な教師に依賴することが成績がよい。特に教育をなすに好都合な設備をなした學校で、準備をなす方が結果がよいのでありますから、小學校は義務教育として國家は强制的に人間としての準備を施す所となつてゐます。只督促せられるが儘に就學させるのは宜しくないのであります。また中等程度になれば到底父母に於て一切の準備をなすことが出來ないので、誰でも學校に入學せしめることを希望するのであります。

四

しかし幼兒の時代には、果して幼稚園に入園させねばならぬでありませうか。この疑問は多くの方々が常に起される筈のものであります。幼稚園入園の必要は左程に考へないが、小學校へ入學の都合上入園させるといふ方も少くありますま

いまた子供が家庭にゐると面倒だから幼稚園へやつて置きますと、簡單にお考になる母親もありませう。是等が幼稚園入園の理由として果して妥當でありませうか。

若し母親が他の雜務のために幼兒保育を妨げられることがなく、母親にその子を保育する充分の準備があれば、强ひて幼稚園に幼兒を入園させねばならぬとは考へられません。成程教育の基礎は小學校入學以前の保育に存するのでありますから、幼兒保育位重大な務はありませんが、之を母親に於て滯りなく行ふことが出來るならば家庭に於ける保育こそ最大良法であります。しかし世間の母親には專心幼兒の保育のみに從事出來ない實情であります。

家庭のいろ〳〵の雜務や來客やまた職業等のため幼兒の保育を專心行ふことが出來ません。假りにかゝる雜務のない人でも幼兒の面倒や保育は却つて乳母や女中やまたは家庭教師に任せる方が少くないのであります。また老人に任せるといふ家庭も少くありますまい兎に角上下貧富を問はず今日家庭に於ける幼兒は正當なる保育を受けてゐない狀態が多いのであります。

從つて幼兒の保育は出來るならば幼稚園に於て保姆の手に於て行はれる方がよいといふことになるのであります。

五

幼稚園が家庭の附近にないために入園することが出來ない今日では、是非幼稚園に入園させたいと思つても仕方がないから國家はもつと幼稚園の發達を計畫する方策を取らねばならず、また私立で經營する幼稚園がモツト〳〵增加することを希望するのであります。家庭に於て母親の保育は不十分であり、子守や女中や小僧相手の幼兒の生活は實に不自然なものであります。また老人が幼兒を相手としての保育は幼兒にとつてはこの上もない迷惑でありませう。大人老人の身體が自由にまはらないのは活力が消耗しての結果であり幼兒の身體がまはらないのは活力旺盛なるも四肢の使用が都合よく行

はれないからであります。よく年寄と子供と著しく似寄つたものにいたしますが、幼兒にとつては甚だ迷惑でありませう。幼兒は決して年寄りや大人との遊戯を好むものではありません。物珍しさに一時は年寄りと遊ぶことがあつても何時の間にか子供同志は老人より離れて遊ぶのが自然であります。この點から考へても子供を家庭にのみ束縛せんとすることは甚だ無理であります。子供部屋の設があり、子供仲間で遊ぶことの出來る家庭は極く少數しかありますまい。或は皆無といつてよい位でありませう。

幼稚園は同年齢位の幼兒が集つて眞に子供の生活をなしその間に保育せられるのであります。「私どもの子供はなか〳〵ませて居りますから」とか「私どもの子どもは遊相手がなくて困ります」とか、「私どもの子は間食をしたがつて困る」とか、いろ〳〵申される子供たちは是非幼稚園に入れて眞に子供としての生活をさせるに限ると思はれます。

六

尤も幼稚園は一人の子供のために存するのでもなく、また保姆は乳母や家庭教師とは異りますので、多くの幼兒を相手に保育するのでありますから不充分であらうと思はれるならば、それは大なる誤りであります。多數の幼兒が共同生活をなす處に幼稚園の使命があり、多數の幼兒を一團として保育する處に家庭保育に見られない長所があるのであります。兎角獨子は我儘であることを考へるとこの間の消息が明白となります、また子供は大人の力を借りず自分で自分の用を辨することを非常に希望するもので、「自分で出來ないくせに女中に釦をかけて貰ふ」ことを厭ふ一例を考へ合せても、乳母や女中の行屆いた世話が眞に保育の要諦でないことが明白であります。

七

更に幼稚園は幼兒の生活に關する研究調査をなして幼兒保育の方法を研究することが今日の幼稚園に於ける一使命ではありませんか。進んで家庭に於ける保育の缺を補ふと共に家庭に於ける幼兒保育を指導し啓發することも非常に重要なる任務であると考へられます、また女學校の教育に於て將來の母たるべき女生徒が保育の方法、保育の趣味、母性愛の陶冶上幼稚園を必要とするのであります。是等は寧ろ遠つた意味に於ける幼稚園の使命でありますが、實に三省すべき重要事と考へられるのであります。（一四、一、三一）

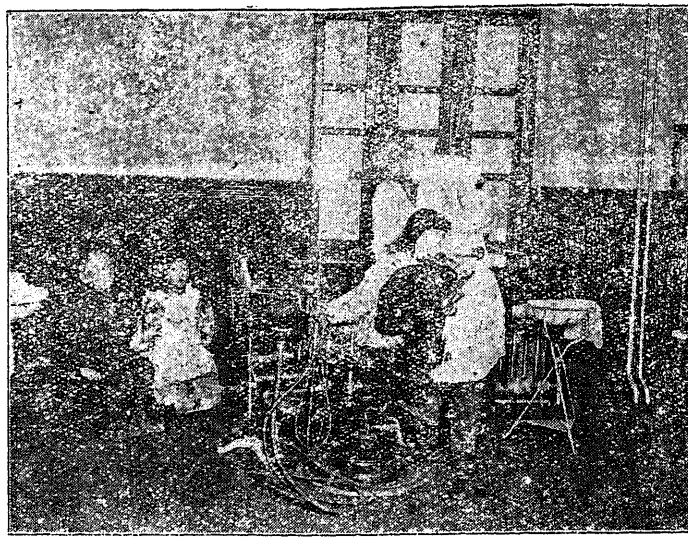
幼兒の口腔衛生について

金谷　增

幼兒の身體養護につきましては主としてその母親の責にあることゝ存じます、ところが實際におきましては中々さう參りません、いつも幼稚園で園送とともに氣をつけねばならんことが多いのでございます。「お宅のお子さんは結膜炎であるから眼醫者へやつて下さい」あなたのお子さんは耳だれが出て居ますから一度耳鼻科へおつれ下さい」或は「目方が急にへつたがどこかに異常がございますまいか」と絶えず注意をしなければならんのでございます。殊に口腔齒牙の衛生につきましては殆ど注意を拂はれて居ないことは實に驚くばかりでございます。これは當に當部内のみならず我が國ではまだ一般に幼兒期に於て尤も大切な口腔衛生の事は餘り注意せられて居ないのは甚嘆かはしい事だと思ひます。

さて私が幼兒の齒に注意を始めましたのはかなり以前からのことでございまして幼兒が最も樂しむお辨當の時間になりまして他の子どもはいそ〳〵お箸を取り出すと齒の痛む子どもはシクシク泣き出す、空腹である、食慾が起る、食物を口

に入れると齒が痛み出す。その有樣が實にかわいさうで堪りません「どうか幼兒に齒痛を覺えさせたくないものだ」と思つたのに始まつた事でございまして或は含嗽を奬勵してみたり或は齲齒の豫防法をお母樣方に話してみたりいろ〳〵してみましたがどうも思ふ樣に參りません何とか徹底的に着手して見たいものだ、それにはどうしても專門醫に診察してもらふ必要があるどうかよい先生を得たいものだと苦心して居りました、ところが偶々當大阪市の囑託ドクトル濱野松太郎氏は子供の齒牙を特に御研究になり御造詣深いことをきゝまして多忙な氏をわづらはすことに願ひました、幸同先生にはこちらの切な願望をいれられまして時間の都合をおつけ下さいまして全く厚意的に全幼兒を親切に御診察下さつたのでございます。



ところが始めて診て貰つた結果を申して見ますと驚くことには二百人餘りの幼兒の中たつた一人を除く外は全部齲齒に罹つて居たのでございます、しかもその齲齒の數が一人平均十一本卽約二十本齒が生えてゐるその半數以上を有して居ると云ふことが分りました、これは由々しいことだ如何にすれば有效な處置が出來るかと思ひましたが先づこれには家庭の方に口腔衞生の必要な所以を知らせる必要があると思ひました。それで日を期してお母樣方のお集りをして右の先生に來て貰つて講話を願つたのでございます、そ

の要領を申して見ますと

第一　齲齒と全身病との關係

齒が惡ければ咀嚼不十分なため直接胃腸を害するのは云ふ迄もないことでございますが、齲齒のため齒根に膿がたまつてそれから蓄濃症を起したり、或は淋巴腺を犯すなど皆齒牙から起る直接の病氣でございます、ところが齒と全々關係のない眼を惡くしたり心臟の鼓動をはげしくしたり、或は腎臟が犯されたり或は氣を狂はせたり全く緣のない病氣を齒から引起すことが隨分あるのでございます。

第二　精神に及ぼす影響

齒牙の惡い子どもは常に不愉快な狀態にあつて、自然腦の働に及ぼし學校の成績宜しからず、智能の發達と關係をもつて居るものであります。

第三　乳齒の任務

これは發達の盛な幼兒の食物を咀すると云ふ大きな任務でございますが、尙この外に永久齒の生える導きをするのでございます。卽ち健康な乳齒は適當な時期におきまして齒根の吸收作用を起し、その根が自然に吸收されて萎縮し下から生えてくる。永久齒によい場所を與へて永久齒の成長につれて自然脫落するものでございます。もしその乳齒が齲齒のため枯死して居りますならば、そんな作用は行ひません。從つて永久齒はその生え場所を失つて勝手に惡い場所へ生えて參ります。そして齒列を惡くするのでございます。ですから乳齒は物を咀嚼する外にこんな大切なしごとを持つて居ることを忘れてはなりません。

第四　六歲臼齒

これは口中の大黒柱と云はれて居る大切な齒で、幼稚園の年長兒にそろ〳〵生え出す前より六番目の齒卽ち現在發生して居る乳齒の奥に生える上下四本の齒であります。これは脫けたあとに生えるのではなく、前に申す通り現在ある乳齒の奥に生えるのでございますから、全く知らぬ內に生えて、知らぬ內に齲齒にかゝつて居ることが多くあるのでございますから、特に注意しなければなりません。

第五　幼兒齒牙の保護

これを要するに、幼兒の齒牙を大切にする事は、生涯を通ずる健康の鍵を與へることになるのでございますから、左の點に注意をして貰ひたいと思ひます。

A　口中を淸潔にすること

卽ち食後每の含嗽は極幼少の頃から續けさせること、幼兒に適當な齒楊子を選んでなるたけ早くから使用させ朝も就寢者もなることなら食後每にも用はせること。

B　手當を早くすること

乳齒でも永久齒でも齲齒を見つけたら、早く醫者に手當をして貰ふこと、從來の樣に乳齒は生え代はるとて打ちやつておくは最もよろしくないこと。

但し輕いむしばは普通の人では分りかねますから、事情が許すなら時々專門醫に診察をして貰ふことが大切であります。

C　圓滿食をとらしむること

これは身體の發育上大切なことのみならず、齒牙の發達の上に大に大切なことであります。肉でも野菜でも硬いものでも軟いものでも適當にとりまぜて與へることが必要であります。軟い物に片よると咀嚼力を要しませんから、自然

顎骨の發達がわるくなるのでございます。

以上は家庭の母親と幼稚園の先生とが相提携して效を奏することでございますが、お母様方がことに注意をして置かねばならぬことゝ思ひます。云々

尙その他歐米諸國の早くより齒牙衛生に注意せらるゝ實際ブラッシ使用法等委曲話されましたので、お母様方も大に感動せられ、はじめて幼兒の齒に注意しなければならんことを知られた様でございます。

それから日を代へて、數人づゝのお母様を呼び、一人一人のお子様について、直接醫師から「この齒はおつけなさい」「この齒は今少ししてから拔くとよろしい」「この膿をもつて居てはちつとも早く拔いて治療しなければなりません」と一々注意を與へて貰ひました。

それで一方子供には齒を大事にすることを申しまして、含嗽やブラッシの使用法などの練習をさせましたが、保護者の方にも子供の方にも大に徹底して參つたのでございます。永く幼稚園に居る子どもの家庭などでは、その園兒一人に止らず、兄弟も、兩親も、それ〴〵手當をしてよろこんで參るのが隨分ございますので、折角注意した甲斐があると思つて嬉しく思ひます。

弊園學務委員長伊藤萬次郎氏この擧に共鳴せられまして、幼兒齒牙治療に關する機械器具一式寄贈せられました。

（この寫眞は、その施設と濱野ドクトルが治療せられる所でございます）

これを利用いたしまして、治療の行き屆いて居ないお子さんの手當をして上げるなら、大に成績の擧げられることであらうと存じまして、大に樂んで居りますと共に同氏に對して深く感謝して居るしだいでございます。

御挨拶

堀七藏

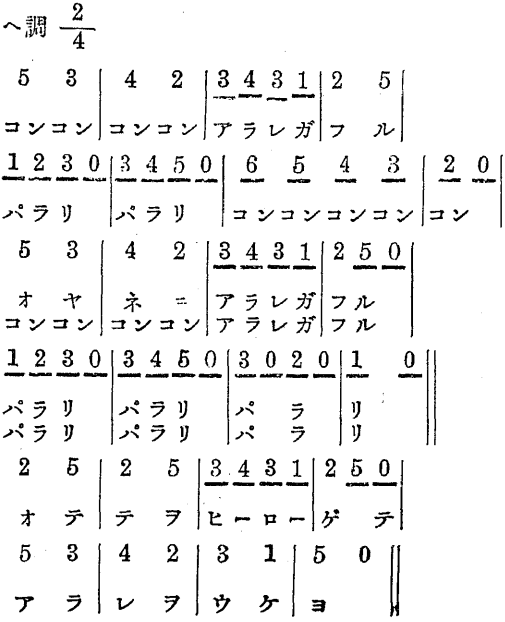
昨年末不肖は東京女子高等師範學校附屬幼稚園主事に命ぜられましたので、併せて本會主幹たるやう會長より命ぜられたのであります。茲に本協會顧問各位並に會員諸君と共に我が國保育事業幼稚園の發達に盡粹すべき機會を得たことを衷心より喜悅し、會員各位の熱誠なる御援助を幾重にも希望する次第であります。我が日本幼稚園協會は、多年の歷史を有して今日に至れるもの、その間幾多の難關に遭遇せるにもかゝはらず、前主幹倉橋教授並に諸先輩各位の御盡力により、今日の發展を見るは誠に慶賀すべきことであります。しかし、我が國の保育事業は今日未だ充分發展せず、我が日本幼稚園協會が大に努力すべき事項が甚だ多いのでありますから、不肖最善の努力をこの方面に致す決心で居ります。殊に「幼兒の教育」は我が國に於ける唯一の幼稚園雜誌でありますから、之を愛撫し保育して、益々健全なる發達を遂げしむべき責任があると考へて居ります。何卒從來以上に一層御援助を賜はらんことを熱望する次第であります。殊に幼兒の教育が、單に各幼稚園に於て愛讀せられるのみならず、一般家庭に於て幼兒保育の指針となるやう、會員各位の御盡力を御願いたします。從つて會員各位の幼兒保育に關する御意見、御抱負、また經驗談或は幼兒に關する研究調査、各地方幼稚園、託兒所の情況等細大となく御投稿下さることを重ねて御願ひいたします。

律動遊戯「あられ」

◎歌曲

作曲　梁田貞
作歌　葛原幽
振付　土川五郎

あられ



1

こんこん〳〵あられが降る
ばらり　ばらり　こんこん〳〵〳〵
お屋根に　あられが　降る
ばらり　ばらり　ばらり
お手々を　ひろげて　あられをうけよ
こんこんこんこんあられがふる
ばらり　ばらり　ばらり

◉遊戯

こんこんこんこん……兩手を胸前に組み寒き氣持にて左へ三歩終りの「こんこん」にて左肩を左に傾け右上を見る、この時に左足は床に直角に右足は右へ伸ばしツマ先を右方に向けて踵をあぐ。

あられがふる……

右へ三歩「ふる」にて右肩を右に傾け左上を見る、右足は床に直角に左足は左へ伸ばしツマ先を左方に向け踵をあぐ。

パラリ……右足を左足につけ兩手を左上方にあげて、右下へ三回に（パ、ラ、リ、輕き足踏をしつゝ右下に流す。

パラリ……兩手を右上に伸ばし前と同じく足踏しつゝ三回に左下方に流す。

コンコンコンコン……兩手を頭上少し前に指先きを合せ左足を引きて四回に兩手を左右に下ろしつゝ躊躇して下を見る。

おや……立ちて左足を一歩前に兩手を左下方に伸ばし左肩を下げて右上を見る。

ねに……右足一歩前に兩手を右下方に伸ばし右肩を下げて左上を見る。

あられが……「おや」と同じ。

ふる……ねにと同じ。

パラリ……左肩を下げ左上を見つゝ、左手を左上より右下に三段に下ろす、二歩後退す。

パラリ……左肩を下げ右上を見つゝ、左手を右上より左下へ三段に下ろす、二歩後退す。

パラ……右肩を下げ左上を見つゝ、右手を左上より右下へ二段に下ろす、一歩後退前の如し。

リ……左肩を下げ右上を見つゝ左手を右上より左下へ一段に下ろす、一歩後退す。

おててを……左足一歩斜左へ兩手を左右に大きく開きて握り、下より體前に持ち來りて斜左前に伸ばして「を」にて兩手

を開　（掌を上に）

ひろげて……右足を右へ兩手を左右に開きて握り下より體前に持ち來り斜右方前に伸ばして「て」にて握りたる拳を開く。

あられを……左へ三歩、兩掌を上に向けそろへて胸の前に受くる如くして上を見る。

うけよ……右へ三歩、同じくあられを受くる如くす。

コンコンコンコンコン……右肩を下げ左上を見て、兩手を左上より體前下方……右方より左上へ戻る樣にまはしつゝ左へ二歩横足をなす。

あられがふる……同じことを右方に行ふ、卽ち左肩を下げ右上を見て兩手を右上より下へ左より右上へまはしつゝ右へ二歩横足す。

パラリ……兩手を頭上少し前に合せ左右に三段に開く（ツマ先にて輕き足蹈をしつゝ）

パラリ……開きたる兩手を左右より大きく頭上に上げ三段に左右に開く（前と同じ）

パラリ……又頭上にあげ三段に下ろしつゝ最後の　り」にて一歩前へ兩手は左右やゝ下方に伸ばして右上を見る。

雪二つあはんとしては又遠く別れて消えぬ春の靑ぞら　　牧　水

子の恩を知つて

東京女高師教授　金子彦二郎

×

彼が學生時代に好んで歌つた、七里ケ濱の遭難學生のみ靈に捧げられた唱歌に、

み空に輝く朝日のみ光り
暗きに沈む親の心、
黄金も寶も何しやは集めむ
歸れ、早く母のみ胸に……

といふのがあつた。それはたゞ同じスポーツの方面に遊ぶボートメンの一人として、又その一種言ふべからざる哀しい旋律を辿ることに悲壯美を感じてのことであつて、そこに流露してゐる「親ごゝろ」などには殆ど沒交渉であり無關心なのであつた。それは丁度尋常一、二年の黄口兒が、「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」といふ偈の意を寓した、穢土を厭離し、光明土（極樂往生）を欣求する悲觀的人生觀の讃美歌たる「いろはにほへど散りぬるを…」の今樣を平氣で暗誦してゐるのと同じ心持で……。

彼も要するに、衝突してから始めて「あいたッ……」と涙を沁ませつゝ柱を怨めしげに睨み返すボンクラでしかなかつた。だから子を持たないうちは、やつぱし親の恩も知らねば子の恩も知らない心の近視眼者であつた。

×

時が移つて、月並な人間の營みが彼の身の上にも次第に展開していつた。

彼は夫といふものになつた。何もかも七輪と二枚のお盆で始末の出來る貧乏世帶も張つた。さうして滿一年一箇月目には、今まで男であり、夫でしかなかつた彼は、更にも

う一つの稱號を加へねばならなくなつた。それは五十歳六十歳の親爺盛りの人、嫁にやるやうな娘や中學に出す息子の二三人も抱へ込んでおく頭の禿げかけた男性だけに冠せられるものと今日が日まで合點してゐた「父」といふ鹿爪らしい尊號であつた。「この若さで、このやんちやが『父』かと」擽つたい心で一ぱいであつた彼は、彼の妻から「一寸だつこしてゐて……」と言はれて驚いて二三尺も飛び退いて、どうしても抱いてやらうとはしなかつた程、父らしい父ではなかつた。それは彼の最大な創作物に對して愛を感じなかつた譯でもなければ、抱きかゝへることが厄介だといふのでもない。只一途に恥しく、氣まりが惡かつたのである。だから、彼自身のこの氣恥しさに比べて、彼よりずつと年下で、恥しがりやの彼の妻が、平氣で「ママちやん」らしく振舞つてゐるのを見て「女てものは、何といふ圖々しいものだらう。先天的に母たるべく出來てゐるんだ。」などゝさへ思つてゐた。

父ちやんと呼ばれる年になつたかと、茶目けの多い我をほゝゑむ。

これが其の頃の述懐であつた。

×

平和な六年の歳月が平板に流れた。さうして彼もだん〳〵父らしい人になつて、口にするさへ甚しく氣恥しがつてゐた「父ちやん」と言ふ名詞を、自稱的に使つて

「さあ、父ちやんのとこへお出で」

などと臆面もなく言つてのけ、骨ばつた太い腕に抱擁してやるだけの勇氣と、父性愛の表現とを敢へて爲し得るに至つた。併しこれらの心持も、まだ〳〵眞箇に徹したものではなかつたといふことが、後でわかつた。子を持つて知る親の恩——子は持つて見たが、まだその生活が餘りに平板であり、單調であつたが爲に「子つて可愛いゝもの」といふだけの上辷りな、魂の核心にまで突き入つたものでなかつたらしい。それで、續いて世に出て來て、食卓のもう一角を占領し、戸籍面に今一行賑やかさを增させる小さき者の生れ出なかつたことを、寧ろ幸福とさへ思つてゐた。彼のホームは、やがて

一隅の缺けて淋しき雜煮かな。

といふ詠歎が洩されるまで、六年間といふもの、いつまでも 2+1=3 といふ等式に變化も持來されなかつた。

×

突然に黑い冷たい死魔の手が、2+1=3 の等式をたゝきとはして、3−1=2 といふ淋しい暗いホームに縮少してしまつた。後で加つた小さな生命が六歳を一期として、大君の爲には千代八千代と壽ぎ祝ふ天長節祝日の、祝の歌のまだ消えやらぬ餘韻のうちに、小さき芽生えがかすかな息吹を絕つてしまつたのであつた。

3−1=2 とは、形骸の上のこと、心の生活から見れば實にこの等式は 3−1=0 とさへ言ひたい不合理な等式を結果したのであつた。「掌中の珠を奪はれる」といふ譬喩はどこの馬鹿者の寢言ぞ。彼にとつては實に今まで滿々と膨らめるだけふくらんでゐた風船玉から、すつかり中の瓦斯を拔きとられた以上の大退轉が感じられた。彼の家庭からは照る日の光が奪ひ去られた。春風の優しい息吹も酷寒の夜嵐以上に冷く吹いた。生存の凡ての意義がすつかり消滅させられたやうに、重くるしい頭と、靑黑い頰とをもつた彼等夫妻の顏には、光澤のない瞳があらぬ方のみをみつめつゝあるのが認められ、首が胸の中にまで陷沒するかと思はれるやうな溜息のみが朝に晝に夕に繰返されてゐた。さうして亡き兒を戀ひ慕ふ切なる思は、ともすれば「親の恩」の理解を子に對して要求し、人にも說き、人の說をも肯定してゐた因襲的な道德觀をがらりと破棄させてしまつて、親は、むしろ子に對して愛し何物を以てしても代川することの出來ぬ愛を感ぜさせて貫つて居り、且其の愛を感じてゐることによつて最も幸福に生きてゐる——の恩に對する報謝の念をこそ捧げねばならぬ者であるとの異常なる見解さへ樹立させて來たのであつた。子こそは親の恩人である。かう思ひつくに至つて、はじめて子の有難さ、可愛さといふものが本當に體得され、世俗に「死んだ兒は親に對する高僧智識である」と謂つてゐる語の眞義も了解出來たのであつた。その頃のうたに

夕されば門　に立ちて我待ちし
小さき影よいづちさまよふ。
七たびもとはをこがましあゝせめて

二度なりと生きて來よかし。
この百日斯くてもあられけるよなと
淋しき生をかへり見しはや。

かうして樂しかるべき朝餉夕餉の差向ひの食膳も、小さな影の一つが一角から消え失せてしまつた許りに、何等の興味もそゝらず、黯默のうちに茶碗が授受され、亡き魂が嗜んだシチューも、音を祕めて啜られ、投げ出すやうに置かれた箸の音のみが、わざとらしい空虛な嘲笑を響かせるのであつた。陰慘な濕つぽいそして小さな佛壇から匂ひ出る抹香の香で溷濁された佗びしい生活が、三年といふ長い年月彼の身を心を引ずりまはしたのであつた。

それは餘りに辛い天帝の試錬であり、餘りに長い岩戸どもりであつた。

×

救はれる日がやがて彼の上にめぐつて來た。子の恩に隨喜し、子の愛に飢えてゐた彼の上に、生ける魂の光が惠まれた。彼の心は法悅の境地に優游してゐる。よしや朝の副食物ががんもどきのにしめと菜つぱの糠味噌漬であらうとも、狹い寢室に斜に仰臥してゐる小さき者の爲に、隅つこに押かたまつて、時々には半分疊の上にせり出さねばならなくなつても、そこに寧ろ多くの滿足と愉悅とを見出してゐる。「黃金も寶も何にしやは集めむ。」さうだ〳〵。人間は先づ生きねばならぬ、その生きねばならぬのも子ゆゑにこそ。「子なければほんたうに生きてゐるんではない。一種の微妙なからくりを持つた體のよい消化機關でしか無いのではなからうか。」などとさへ思つてゐる。さうして時折、口の利けない幼兒に向つて、

「これ坊やお前は俺の恩人やぞ。」

と言つて見たりしてゐる。彼はかうして生くるを値ひした生活に心からひたり込むやうにエンジョーイしてゐる。

×

彼はこの記錄の後に、誰やらの言葉から暗示を得た次の言葉をどうしても附け加へずにはおられぬといふ。曰く

……世間の人は、私の長たらしい涙の記錄を馬鹿々々しいと思ふに違ひない。なぜなら「愛兒の死などは、そこにもこゝにも、又昨夜も今朝も、只今も、飽き果てる程夥し

く存在する事柄のほんの一つに過ぎないから。さうしてそれしきの事を重大視する程、世の中の人は閑散ではないから。」と。けれどもそれは正しい人間らしい心の持主の言へることではない。さう言つて侮蔑の色を見せるやうな人も、きつと一度かういふ事件に直面して見ると、愛兒の死をば何物にも代へがたい、悲しく口惜しいものに思ふ時が來るに違ひない。だから、今、世の中の人が無頓着でゐたつて、それに恥ぢることはない。又恥ぢてはならない。私たちは其のありふれた事實の中からも、人生の淋しさに、強く深くぶつかつて見ることが出來るのである。して見ると、謂はゆる小さなことが小さなことでもなく、謂はゆる大きなことが大きな事でも無い。それは要するに心一つの問題だから……　一四、一、三〇

東京保育協會の設立

記者

昨年來東京府視學横島常三郎氏東京市視學田中三郎氏等の盡力によつて東京保育協會が愈々設立せられました。會長には文學博士林博太郎伯が推薦せられました。林伯爵は普通の名譽會長とは大に異ひ御多忙にもかゝはらず率先保育事業の進展を期せられる筈であります。また林伯令夫人は年來保育事業に深き趣味を有せられる方でありますから一層東京保育協會のために御盡力になることゝ思はれます。私は我が國保育事業の進歩發達のために東京保育協會の設立せられたことを衷心より祝賀するものであり同會の益々發展することを國家のため希望して止まないのであり

ます、茲に東京保育協會設立趣意書並に役員更に同會規約を紹介して祝意を表するのであります。

（大正十四年一月廿七日）

東京保育協會設立趣意書

幼兒保育の必要であることは今更申上げるまでもないことであります。けれども、吾國の現狀では、これに對して十分の方法が採られてゐません。幼稚園及び託兒所の設立、幼兒の保育、保姆の待遇及その社會的地位などに關しても、國家は、これに對して十分の保護を加へてはゐないやうに思はれます。これは一方、義務教育の問題があるからでありませうが、義務教育が必要であるかぎりその基礎をなす幼兒保育は一日も忽せにすべからざるものであります。

ことに近頃の學問は、人間の性格の基調が幼兒期において形作られるものであり、教育の方法も、幼兒期において最も困難なものであることを教へるやうになりましたので、吾等は從來よりも一層幼兒保育に意を用ひなければならぬことゝなりました。けれども保育界の現狀は、國家の保護のうすきに比例して頗る不振の狀態にあるのです、ことに勞働者の家庭などには、保護さるべき幼兒が、そのまゝ放棄されてをるのであります。これは、實に國家のために憂ふべき現象であります。

そこで、吾等有志はこの必要かくべからざる幼兒保育を振興し、以つて國家隆昌の基を培はんがために、東京保育協會なるものを設立することにしました。そうしてこれによつて、保育事業の範圍を擴張せしめ、その效果を增大せしめ、併せて、保育に從事するものゝ資格及び待遇を高めしめ以つて國家百年の基礎を確立する上に貢献いたしたいと思ふのであります。こゝに、大方の贊同を得て、この協會の益々發展せんことを祈る次第であります。

東京保育協會役員

會長　文學博士　伯爵　林　博太郎

副會長　東京府學務課長　近藤駿介

副會長　東京市學務課長　藤井利譽

幹事　幹事長　多田房之輔

宇佐美ケイ

岸邊福雄

德永哲

久留島武彦

小向キミ

常務　田中三郎

常務　千葉ヒデ

土川五郎

常務　苫米地三郎

常務　堀七藏

丸山チヨ

常務　横島常三郎

常務　吉田ケイ　和田實

評議員　小林正金　佐藤三吾　難波義雄　野口援太郎　野口幽香　小川圓次郎　櫻井時太郎　神藏國次郎　山内太一　藤岡眞一郎　松原一彦　尾川藤十郎　平岡信敏

顧問　東京府知事　宇佐美勝夫　東京市長　中村是公　東京市助役　岡田忠彦

東京府內務部長　百濟文輔
東京女子高等師範學校長　茨木清次郎
東京聾啞學校長　小西信八
東京女子高等師範學校教授　倉橋惣三
東京高等師範學校教授　楢崎淺太郎
日本女子大學校教授　麻生正藏
東京府女子師範學校長　龍山義亮
東京府青山師範學校長　瀧澤菊太郎
東京府豐島師範學校長　櫻井賢三
林伯爵夫人
關屋宮內次官夫人
（順序不同）

東京保育協會規約

第一條　本會ハ東京府市ニ於ケル保育事業ノ普及發達ヲ圖リ兼ネテ會員ノ修養ヲ奬メ親睦ヲ厚ウスルヲ以テ目的トス

第二條　本會は東京保育協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ當分東京府女子師範學校ニ置ク

第四條　本會ハ東京府市ニ於ケル保育事業ニ從事スル者及本會ノ事業ヲ贊スル者ヲ以テ通常會員トス

第五條　本會ノ事業ノ大要左ノ如シ

一、保育事業ニ關スル協議

二、研究調査及發表

三、講演講習及視察

四、其他本會ノ目的ヲ達スル爲必要ト認ムル事業

第六條　本會ハ保育事業ニ功勞アリト認ムル者又ハ德望家ニシテ本會ノ事業ヲ贊助スルモノヲ推シテ客員トス

第七條　本會ニ顧問若干名ヲ置キ會長之ヲ推薦ス

第八條　本會ニ左ノ役員ヲ置キ顧問客員及ヒ會員中ヨリ之ヲ總會ニ於テ選擧ス

任期ハ會長並ニ副會長ヲ五ケ年トス幹事長幹事ノ任期ハ三ケ年トス評議員ノ任期ハ二ケ年トス

會　長　一名

副會長　二名

幹事長　一名（幹事中ヨリ互選ス）

幹　事　若干名（幹事中ヨリ常務幹事六名ヲ互選ス）

評議員　若干名

但會長ハ必要ニ應ジテ委員ヲ囑託スルコトヲ得

第九條　本會ハ毎年一回總會ヲ開ク

但臨時開會スルコトアルベシ

第十條　通常會員ノ會費ハ年額六拾錢トシ四、十月ノ二期ニ分納スルコトヲ得

但會費トシテ一時ニ金拾圓ヲ全納シタル者ニ對シテハ爾後會費ヲ徴收セズ

第十一條　本會ノ經費ハ會費及寄附金ヲ以テ之ニ充ツ

第十二條　本會ノ豫算及決算ハ評議員會ノ決議承認ヲ經テ毎年之ヲ總會ニ報告スルモノトス

第十三條　本會ノ會計年度ハ四月ヨリ始マリ翌年三月ヲ以テ終リトス

第十四條　本會ニ入會セントスル者ハ其ノ住所、職、氏名、生年月日ヲ記載シ其旨申込ムモノトス（退會セントスルトキ亦同ジ）

第十五條　本會ノ規約變更ハ總會ノ決議ヲ經ルモノトス

重心を應用した玩具の作り方

藤五代策

凡ての物體に働く地球の引力は、實際其の物體の各部に働くものなれども、それ等の引力の合力が働くと見られる一定點がある、其の點は物體を如何なる位置に置いても變りなきものである、此の特別の一定點を其の物の重心と名づける。

一　彌次郎兵衛

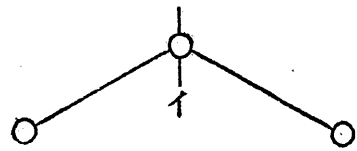
彌次郎兵衛を作るには、豌豆と竹籤（ひご）と喰切とを用意せねばならぬ、先づ少し許りの豆豌を六七時間清水に投じ、之を笊に揚げると充分に膨らんで自在に竹籤が刺せるやうに

なる、竹籤は提灯屋に賣つてゐる、或は自家で竹片を割つて作ることも出來る、喰切は十五錢位のものでよい、或は古い木鋏を使用するのもよかろう。

先づ四寸位の竹籤二本と豌豆三粒とをとりて彌次郎兵衛の頭と兩腕とを作り、頭部には更に一寸位の竹籤を縦に刺す。

今指頭上に(イ)の先端を立てると彌次郎兵衛は安定して落ちない、或は前後に倒しても再び舊位置に復するであらふ、此の彌次郎兵衛の重心は、(イ)の先端よりも少し下方に存在してゐる。

第一圖

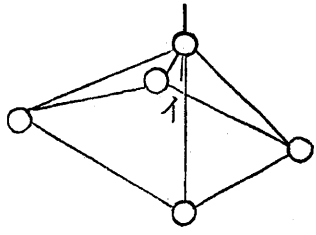


二　指頭上にて廻る獨樂

長さ二寸の竹籤四本にて正方形を作り、更に一寸五分の竹籤四本をとりて、第二圖の如き方錐體を作る、その頂點の豌豆に一寸の竹籤を刺して獨樂の心軸に作る。

今左手の四指を輕く握りて食指のみを縦に延ばし、其の先端に獨樂の心軸の下端(イ)を載せ、軸の上部をつまんで捻ればよく回轉する。

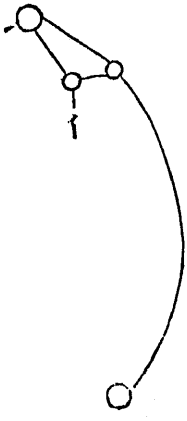
第二圖



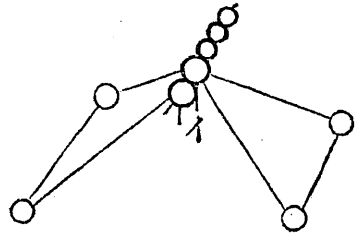
三　長尾の鳥

第三圖は長尾の鳥である、此の玩具に於て特に注意すべきことは、頭と尾端に用ひる豌豆は成るべく大きいものを選ぶ、之に反して臀部と腹部との豌豆は小なるものを選ばねばならぬ且つ尾に用ひる長い竹籤は指先にてヂワ〳〵曲げて彎曲せしめねばならぬ。かうして作つた長尾鳥の脚部(イ)を指先きに載せて遊ぶのである。

第三圖



第四圖



四蜻蛉

第四圖は豌豆と竹籤とを用ひて蜻蛉を作つたものである。蜻蛉の頭の豆は成るべく大なるものをとり、腹部のものは次第に小なるものを用ひる。又翅は稍下方に垂れ其の前端は頭部よりも前方に突出るやうに注意せねばならぬ。最後に頭部より第二番目の豌豆の下方に、五分位の竹籤をさして、指頭に載せて動かすのである。

會員募集

東京保育協會

眩惑

土川五郎

「あばたもえくぼ」といふ事がある。人が惑ふ時はとても常識の外である。惑ふものがあればそこに惑はせんとするものがある。人の弱點に取入つて、自分の利を占め樣とするものもある。

近頃は藝術の世の中で、猫も杓子も藝術といふ、藝術かぶれが、こゝそこに滿ちて居る。これ故に藝術と名を冠すれば其本はよく賣れる。其物は見る人を多く吸込むことが出來る。遊戯にも、舞踊にも、繪葉書にも、人形にも、凡てが藝術の旗をひらめかす。

我々保育者は其數多きに迷ひ、其撰擇の餘融もなく、一寸面白い、一寸よいと、一寸式に取入れる。幼兒に與へて見ると一寸喜ぶ。この薄つぺらな喜びをこどもの深い心の底からの喜びとはき違へて先生も喜ぶ。これで藝術教育が出來た。世間に後れぬ保育をして居ると、自分だけ都合のよい解決して居らるゝ方もないではない。

數ある中には、眞に敬服すべき尊重すべき童謠もあり、曲もあり、遊戯もある。其かはりに一夜漬けのもある。其一夜漬けに一寸したよい香のあるのがある。多くは其香に迷はされる。何かないか〳〵と新しがる人が、多く其香に迷はされて、ゑくぼとあばたの距りを近づける。殊に高尚な奥深い音樂や、色彩や、美に對する修養のある人は、其撰ぶ途を誤る事は少ないが、少しも素養のない低級の人程甚だしい迷ひを起すものである。

今童謠の事は述べずに、音樂と遊戯とについて一言して、御參考に供したい。

子供の音樂は、純正でなければならない。高尚で品がよく、且よく子供を捕へたものでなければならぬ。彼の民謠や俗曲の如き其物は決して惡いとは云はぬ。民衆的に大に發達せしめねばならぬ。併しこれを幼稚園に取入れる事は問題である。幼稚園は幼兒を教育する場所である。教育といふ一つの綱でこして與へねばならぬ。一寸面白い調子、變つたリズムに欺かれて、無條件で取入れて、純眞な藝術家である所の子供の頭を低級に導き、趣味を劣境に引き入れることは保育者として忍びない所である。

童謠にしても、眞面目なもの、曲も眞面目なもの、こゝに眞面目な子供が導かれねばならぬ。

遊戯にしても、子供の遊びとしては、相當の合理的根據がなければならぬ。子供が喜ぶから、あの振りが面白いから、

かゝる考へで取り入れて子供に與ふる事は、前に申した如く、大切な子供に、低級な趣味を與へて低くして行くものである。

子供の遊戯は、尠くとも子供の遊戯でなければならない。それ故に子供の心理子供の表情が基礎となつて、始めて子供に生活化し、子供の深い永續きのする喜びとなるのである。

幼兒の教育には何故藝術を取入れるか、どの程度迄取入れべきか、如便なる平段の下に用ふべきか、それがどれだけの價値を有して居るか、これ等の問題に對して、過日岡山の大會で多少議せられた樣である。私は不幸にして出席し得なかつたから其樣子も知らない。唯近來世の中の弊は、保育界にも遺憾なく入り込んで居る樣である。

靜かに過去を考へて見ませう。幼稚園の唱歌であれ、遊戯であれ、手工でも、製作でも、今更事新らしく藝術がらないでも、既に〳〵立派に藝術は加味されて居るではないか。唯其程度、其高さ、其美しさ、其感じが保育者の程度によつて其深さを保つて居るのもあれば、又空に歸して居るのもあつた。併し其胚珠はともかく植え付けられて居た。

然るに數年前から童謠が流行して來て、誰も彼も騷ぎ出した。作る人も、作曲する人も、本として賣る人も、種々雜多で其數實に驚くべきものがある。そこでこんどは之れに振り付けをする人も、童謠踊の童謠、遊戯とか、新舞踊とか、目先きをかへて之れを宣傳する樣になつた。

私をともすると間違つた人が舞踊家であると云つたり、講習の廣告に書かれた事がある。私は舞踊家ではない。舞踊家は藤間、若柳、花柳、西川、片山、楳茂登、山村の樣な諸　である。其振付けをしても、決して大なる責任は持つて居ない。吾々遊戯を作るには、これを子供に與へて子供を教育して行くために作るので、こゝに之れを子供に與へて其子供の將來迄影響を及ぼす事を考へて作らねばならぬ。

こゝが舞踊家と教育者の違ひで、此の點から私は矢張皆樣と同じく、保育者であり、教育者であると考へて居ります。

舞踊家が一つの作品をするのに、實に人に知られぬ苦心が存するのであるが、遊戯を作るにはかゝる大なる責任感を以てなさねばならぬ。遊戯は其個性の現れである事からも自重せねばならぬ。

近來舞踊も子供のものを作られ、時々發表さるゝ事は眞に喜ばしい事と思ふ。我國の舞踊も一生面を開拓すべき運命になつて居る。其作られる子供のものが、未だ始期であるために、子供を捕へるのは尠なくて、唯子供は大人を小さくしたものといふ考へに捕はれて居る事と、もう一つは日本在來の舞踊の形を脱し得ないで、矢張大人のものが多い。何とか脱却した新生面が欲しい樣な感がするのです。

保育者の内でも、此の舞踊を少し手をかへて幼兒に與へて居る方もある。舞踊家の作らるゝものは見せる爲めのもの、吾々が子供に與へるのは、子供自分が樂むもの（人から見ては面白いと感ずるや否や問題ではない。）こゝに相違がある。舞踊家の擇む曲は民謡又はこれに近いものが多いために、曲を擇む暇もなくして、之れを取り入れる事は大いに謹まねばならぬ。

私もある地方で此種の童謡踊りを見せられた事があつた。なさる方は若い女先生五六人で、見て居ると、〇〇の手踊を見る感じがした。少しも子供の氣分にはなれない。そして其先生の曰く、「子供が喜ぶ」と。吾々保育者は小學校の先生より一歩先きんぜねばならぬ。何となれば一番年少者を教育するので、將來の遠いものを教へ導くのであるからである。

小學校が今は目ざめて、童謡も撰擇し、曲も高尚な品のよいものにより、目下低下せんとする藝術教育を防止し、これを高からしめんとし、大いに趣きを異にして來た。多くの音樂家も大いに此の點に務めつゝある今日、保育者がまだ覺醒しないで居る計りか、平氣で寧ろ得意がつて前者の轍を踏んで居つては、清淨無垢な子供に相すまぬ事が致します。

大いに此點をお互に考へて見たいと思ふ。

東京市保育會の近況

記者

東京市保育會は、昨年の秋に萬難を排してめざましく復興の聲をあげ、震災の爲め一層困難を來せる保育事業の爲に大に協力と聲援を致し、會長、藤井利譽君をはじめ、田中視學、倉橋教授、土川顧問の熱心なる贊助の下に望み多き復興第二年を迎ふるに至つた。

去る一月三十一日、同會は東京市立番町尋常小學校附屬幼稚園に新年會を開催し、會員相互の親睦を計ると同時に、本年度に於ける會の計畫に就いて懇談を交した。當日は月末多端、ことに稀有の降雪ありしにもかゝはらず、殆ど全會員出席あり、なほ田中視學、土川顧問も列席された。

開會の辭は、小川幹事急用差支の爲め服部幹事之に代り、引き續き發會後の報告、即ち幹事會、委員會に於ける保姆給の問題と、全國聯合保育會規約の事と、東京女子高等師範附屬幼稚園主事堀七藏君を新に客員として迎へ、同時に前主事倉橋惣三君を顧問とする事とを述べられた。引き續き田中視學は東京保育協會の設立趣旨に就きて演說され、土川顧問の御扶掖の後は、會員諸姉思ひ〳〵の五分間演說に移つた。勤儉週間の主旨に背かぬ簡素な美味に打ちくつろいだ一同は當日番外の餘興として、本鄉區第一幼稚園保姆諸姉の童謠踊り、土川先生最近振付をされた「あられ」「蓄音機」と表情遊戲「荒城の月」は全員の合唱に伴れて、先生自ら優雅な手振りを運ばれ、一同時のうつるのを氣づかなかつた。最後の餘興を終つて散開したのは、やゝのびた日脚が早や傾きつくす頃であつた。

此日、よき親睦の交はされた事を誰も喜んで別れたのであつたが、唯一つ遺憾なのは、研究、希望の充ち滿ちてゐる若き姉妹方の一言をも開き得ないことであつた。言ふべき機會を與へられ、言ふべき多くを持ちながら、躊躇するのは現代人の爲すべき事ではない。それでは「逋へば立て」といふが、折角復興の東京市保育會、起つどころか逋ふことさへもおぼつかない營養不良に陷つてしまふ。（記事脫線の罪を謝す）

なほ同會は本年度事業の第一歩として、來る二月十七日午後三時より番町尋常小學校に於て、最近歐洲に於ける幼稚園事業に就て研究調査を終へて歸朝せられた、小林宗一君のダニクロースリトミックの講演と實演を催す事になつた。

（『幽』、二、五）

『兼ちやん』

東京女子高等師範學校教授　岡田美津

第三　お茶の會

田村一家は「原田の叔母さん」の家へ、お茶に招ばれて行く途中だつた。心配氣なお芳は、叔母さんのうちへ行つての行儀について、兼ちやんにいつてきかせてゐるところだつた。

「あのね、兼ちやんや、母ちやんを困らせるんぢやないよ。原田の叔母さんは、ほんとに上品がつてる人で、ちきに氣を惡くするからね。」
「全くだ！」と吉藏は引取つて「今日はな、行儀よくするんだぞ。」
「全くだ！」と兼公が眞似した。
「そんな事、言ふもんぢやないつて、母ちやんはいくども、いくども、お前にいつたぢやないか。」と母親がたしなめた。
「あたい忘れたんだよ。」
「そんな事いつてるところを、原田さんが聞かうもんなら、叔母さんは怒つてしまふよ。それからお前さんもね。」吉藏の方を向いて「この子の前で何か言ふ時には、少し氣を付けて下さいよ。この子は鸚鵡みたように口眞似をするから。」
「全くだ！　氣を付けようよ。」と、吉藏は大眞面目に答へた。お芳は肩をひそめたり、微笑んだりして、
「困つた人だね。」と言つた。
「原田の叔母さんとこにお饅頭ある？」と兼公が尋ねた。
「何がある如行つて見れば分るよ。」とお芳は言つた。「それからね、いゝかへ兼ちやん、パンを二片程食べてからでなくては、ジャムをおくれなんていふんぢやないよ。そんな事は行儀のわるいことなんだよ。そして叔母さんは、やかましやだから。……それから袖口で口のはたを拭いちやいけないんだよ。いゝかへ。ハンケチを出して一寸口のとこをなでるようにするの。……それからね、お茶をこぼしたり、飲んだあとにのこつてるお砂糖を吸んだり　ないでね……。それから何か下へ落しても、こゞんで拾はないの。食べてしまつたようなふりをしてゐるの。……それから……」
「いろんな事を考へ出すなあ、えお芳。」と吉藏が口を出した。
「だつてお前さん、兼公にいつてきかせて置かないと、私が困るやうな事をこの子はするもの。男ならなんでもないんた

らうが女つてものは、義理の姉の前で恥を掻きたくないと思ふからね。それから、お前さんも氣をつけておくれよ。冗談をいふ前に考へてね。姉さんは上品がつてゐて、ぢきに腹を立つから。」

「でも、お前の兄貴は可笑しい話が好きだぜ。」

「それあ、兄さんは氣のよい人さ。でもやつぱり大聲で笑はせるような事はいはないがいゝよ。それから兼公が生意氣な事をいつても、お前さん笑つちやいけないよ。」

「よし〳〵。」と吉藏は機嫌よく請け合つて「お前は、おれの事まで案じてゐるんだな。と兼公と同等か。」

「馬鹿な事おいひでない。お前さんがわるいなんていつてるんぢやないよ。たゞね、時々お前さんが忘れて……」

と話してゐると兼公が原田の叔母さんの家が見えると大聲を出した。

吉藏は新聞の割いたのを煙管に塡めながら、

「うん、こゝらか三つ目の塀がそうだ。」といつて、カラを引張つたりネクタイを緊くしたり、帽子を片目隠しといふ風に曲げて被つたり、お芳に目くぼせしたり千代坊をあやしたりした。塀の内へ入りながら、

「おら……入るより自宅へ歸つた方が好きな位だ。」と吉藏が言ひ出した。

「何だね！お前さん、原田の姉さんはちやんとした人だし……それに……それにそう長く居ないでもいゝんだから。ちよいと兼公の頭髪をもすこし立つやうにしておやりよ。髪が寢てゐるのはよくない。……さ、お前さん、行つて案内のベルを鳴らしておくんなさい。いゝかへ、戸内へ入らないうちに奥さんは御在宅ですかつていふんですよ。」

「だつてお前、留守になるんならおれ達をお茶に招ぶ事はないだらうぢやないか。」

「困るね、この人はちいさい女中が居るから、奥さんはお在宅ですかと女中にきくんだよ。いゝかへ。よいお天氣ですの、なんだのつて言ふんぢやないよ。だゞ奥さんお在宅ですかといふの。分つた？」

「ま、ま、何でもいゝいふ。通りにするよ。」と言ひ〳〵吉藏はベルを鳴らした。そして小聲で、
「在宅にゐるようだせ。誰かに怒鳴つてらあ。」
「シ！シ！　私の言つたようにすればいゝんだよ。」
玄關の戸が明いたので吉藏は極まり惡るさうに、敎はつた通りを述べた。
「どうぞお入り下さい。」と小いさな頰の紅い、頭だけは大人風に結つてゐるがまだ子供の服裝をしてる女中がいつた。
「足を拭いて、足を拭いて。」とお芳は大きな嗚き聲で兼公に注意した。「よく裏を拭くの。」
兼公は力一杯に靴を拭いて、一同のあとから次の間へはいつていつた。そして、
「お父ちやん。あれより、もつといゝ時計がうちにあるね。」と隅にある置時計を指してかすれ聲で話した。
「默つて！」と母親は氣を揉んで叱つた。
「母ちやん。帽子、あたいのかくしに入れとくの。」と兼公が尋ねた。
「そうぢやない〳〵。お前さん。この子のもお前さんの帽子の傍へ置いといて下さい。」
そこへ原田の妻君が出て來て挨拶をし、一同を客間へ案内した。そこにはお茶の支度が出來てゐた。原田のうちは、この頃その雜貨店が繁昌するので、金まはりがよくなり妻君は質朴な親戚達を見下し、その言葉遣や行儀を下品がるのだが妻君の行儀の方がいやに氣取つたところがあつてその言葉と來たら知つたふりの妙なものだつた。
一同爐の前に座を占めると妻君は
「兼ちやん、丈夫でゐるかい。」と尋ねた。
兼公は食卓の上の御馳走を眺め〳〵、
「あたい、丈夫なの。」と答へた。

「丈夫でそのあとは？」と叔母さんが尋ねた。
「丈夫です、御かげさまでといふんだよ。」と母親が肱で突きながら囁いた。
「丈夫です、御かげ様で、」と兼公は從頃しくいつて「あたい動物園にいつたよ。」と言つた。
「オヤさうかい。そして何を見たの？」
「いろんな動物を見たの、御かけ様で。」と兼公は答へた。
「兄さんは如何です。」とお芳は少し狼狽てゝ訊いた。
「宅はおかげで達者で居ますがね、今日はあいにく店が明けられないからつて。店の男がきのふ電車に轢かれましてね。」
「あゝあの電車！」とお芳はいつて「私も兼公が轢かれて片足なくして歸へつて來やしないかと始終心配でなりませんよ。」
「店の男は腦のシントンを起したのですよ。」と妻君は眞顏で「卵を一ダースと鹽豚肉を一斤よそへ持つてく途中にそんな目に遇つたんですよ。」
「まあ、何ていふ事でせう。」とお芳はいつて「そして卵はみんな破れましたか。」
「二つ助かつたきり。」
妻君はなほもその不慮の出來事を委しく話してゐると吉藏と兼公とは窓から外を眺め、匍はせて獨り遊びをさせておいた千代ちやんは原田の妻君が編みかけにしておいた靴下を籠の中から持ち出してズル〳〵ほぐして樂しんでゐた。
やがて紅頰の女中が茶瓶を持つてはいつて來た。一同は食卓のそれ〳〵の席に着き、千代ちやんは母親の膝に抱かれて、ナイフに觸つてはいけないと敎へられた。
原田の妻君は吉藏をじつと視て、

「吉藏さん、どうぞ、お祈りをなすつて下さい。」と言つた。
吉藏は顏を眞赤にして何かわからぬ事をくど〳〵いつて、それが終ると額の汗を拭いて鼻を音高くかんだ。
妻君はありがたくないお祈りだと思つたやうな顏を一寸したが、すぐ主人役を勤めだした。
兼ちやんは、叔母さんが耳附きの杯に牛乳と熱湯とを入れてるを見て、
母ちやん。あたい牛乳いらないよ。」といつた。
「あれは千代坊のだよ。」だげど、何でもくれるものを貰ふのだよ。」とお芳は囁いた。
始め五分間程談話が途切れてしまつたが、やがて原田の妻君が
「吉藏さん、この冬はちよい〳〵よそへお出掛けですか。」と氣取つていひ出した。
吉藏は口をあいて呆れ顏をした。
「いや、お蔭で正月以來一日も仕事にはぐれた事がありませんや。」
「宴會だの園遊會だつていふようなものへといふ事なんです。」と妻君は苦笑した。
「あ、さうですかい。イヤお芳も私も家に居るのが好きでね、……ま、動物園へいつたり寄席へいつたり二三度「夜の會」に行つた位さ。」
「あたい夜の會好きだよ。」と兼ちやんはジヤムの壺へ匙を突込みながらいつた。この子はバタつきパンの片を二つまで下へおとしてしまつたのだが感心にも母の言ひ付けを記憶してゐて拾ひ上げやうともしなかつた。
「ほんとに、兼公こそ夜の會ぢや盛なもんでね。こないだも蜜柑を四つ、菓子なんか數へきれねい程やらかしたんです。」と吉藏が話した。
「そのお蔭であくる朝油藥を飲まされてね。」とお芳は千代坊に食べさせるのを商賣のようにしながらいつた。

「お前、油ぐすり好きかへ。」と原田の妻君は苦笑ひしながら尋ねた。
兼ちやんは口一杯頬張りながら、
「ムーン、叔母ちやん好きかい。」と言ひ返した。
「何をいふんです。」とお芳は叱つた。
原田の妻君は少しどぎまぎしながら、
「ビスケツトを一ついかゞ。吉藏さん。お茶を注ぎませう。お芳さんお茶碗がからでせう。」
「ハイ、ありがたう。之は大層結構なお菓子ですね。」とお芳がいふと、
「それはね、黑木つていふお醫者さんの奥さんから敎はつたのですの。黑木の奥さんは、御親類がみんな高貴て、中々キドク的のおうちなんですよ。私やお心安く願つてゐましてね、こんどの月曜日にも、ある會で御遇ひ申すつもり……よい方ばかりの集りでして……あの方と私と……
「お父ちやん、あたい御饅頭が欲しい。」
「いけませんよ。一つ食べたんだから。」とお芳がいつた。
「もう二つ欲しいんだよ、母ちやん。」
「いけません、……それで今のお話のつゞきは。」
「今申す通り……」
「お父ちやん、ぶどう入りのお菓子おくれ。」と兼公が小聲でいつた。
吉藏は兼公に眼くばせして、自分の方へそろり〳〵とその菓子の入れ物を曳つぱり寄せやうとした。
妻君同志は、こんどのその集りの談話に夢中になつて目前の事には頓着なしの風だつた。菓子鉢がだん〳〵そばへ來て

兼公はそつと手を伸した。ぶどう菓子を一つせしめて手を引込めやうとするとその途端に母親が見付けて、
「兼ちやん！」と怒鳴つた。
不運の兼ちやんはハツとした。その拍子にジヤムの壺がひつくりかへりジヤムがテーブル掛の上に流れ擴がつた。兼ちやんの茶碗もひつくりかへつて床に落ちて粉微塵に碎けた。千代ちやんは何か面白い餘興を自分もしなければならないと勘違ひをして、キヤツ〳〵と聲を立てゝ牛乳の杯を兼ちやんの茶碗のあとから轉ばした。すると父親が大狼狽で起ち上つた拍子に皿とビスケツト五個をひきづり落していよ〳〵損害を大きくした。
吉藏は途方にくれてつツ立つて居ると、お芳は口もきけなくなり顏色も蒼くなつてしまつてゐた。千代ちやんは冗談やちないのだと解つたかして、ワア〳〵啼き出した。
兼ちやんは唇を慄はし眼に涙を一杯溜めて、自分の仕出來した不始末をじつと眺めてゐた。誰も原因の叔母さんの顏を見るものがなかつたが……その顏は恐ろし……實際恐ろしかつた。叔母さんが口をきいた時は……言語數が少なく刄物で切るやうな感があつた。その言語は子供の育て方についてゞ自分は子供のないのを心から有難がつてゐるとの意味であつた。可哀さうにお芳は兼公に代つて詫び、實に申譯がないといひ自宅へ歸つたら懲らしますと述べた。お茶がすんでからの一時間は居心地のいゝものであつたから、吉藏は原田の家を出ると思はず安堵の樣子を見せた。
「もう、お茶に招ぶまいな。」とかれはいつた。
お芳は默つてゐた。
「兼公がごめんなさいつてあやまつてるぜ。」とやがて吉藏がいつた。
「さうだらともさ。」とお芳は呟いた。
「油藥を飲まなくつていけなけれあ飲むとよ。」とまた吉藏がいふ。

「油ぐすり位ぢやすまないよ。」

「だつてお前、あの子がわるいんでもないよ。つい出來てしまつたんぢやねいか。今日は勘辨してやれよ、ェお芳。おれも皿を一枚破した千代坊も杯をこはしたんぢやねいか。おれ達も油藥を飲んでおまけにもつと何かされるんかい。」

「お前さんは、そうやつて私を說き伏せるんだね。」と言つて此事件は無事に納まつてしまつた。

十分程すると吉藏は兼公が後れて歩いてるのに氣がついた。それで二三歩後戻りして悴の手を曳いてやりながら、

「兼公、お前ロんなかへ何か入れてるんだ。」と急に尋ねた。

兼公はかくしから何か取出した。

「お父ちやん、少しあげよう。ぶどう入りのお菓子だよ。」と應揚にいつた。（つゞく）

編輯だより

○ふりつもつた雪の間に麥の芽が萠え、窓近い梅一輪がほころびて、しづかに早春が訪れる。霜を蹴つて吹く如月の風は肌をさしても暖い大地には已に十分育まれた春の聲がさゝやいてゐる。

ひきしまつた二月の天と、望みあふるる早春の心！

○全國聯合保育會、東京保育協會、又さきには當市保育會と多くの保育事業を中心とする會合が相前後して設立された。我が幼兒教育界の爲に大に慶すべきである。各自の目的と計畫に從つてよき歩を進められん事を祈る。

○曩年より連載せられた馬場先生の「保育細目」は前號を以て完結された、我等はあの「保育細目」によつて幾多の反省指導參考を得た事であるか、このさゝやかな本誌の內容充實に多くの助力を下された馬場先生に對し心からの謝意を表す。

○小さいながら本誌は「婦人と子ども」以來の唯一なる幼兒教育雜誌として長い永い歴史を持つ。幸に有名無名の寄稿者により良き努力の結果あらん事を期待する。

投稿歡迎！

定價表			
冊數	定價	郵稅
一冊	金參拾五錢	金貳錢
六冊(前金)	金貳圓拾錢	不要
十二冊(前金)	金四圓貳拾錢	不要

廣告料

表紙(前付) 金七拾圓 一頁以下御斷
表紙裏付 金七拾圓 同
普通面一頁 金四拾五圓 同

御注意

(外國行郵稅は一部十二錢の割にて御拂込下さい)
▽本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金で御送金下さい(東京四六壹壹壹番教文書院宛)
▽前金切れの節は帶紙に「前金切れ」と致します。
▽郵券送金の節は一割增で一錢切手に願ひます。
▽本誌の一切は教文書院宛御照會下さい。

大正十四年二月十一日納本
大正十四年二月十五日發行

第二十五卷第二號

編輯者 東京女子高等師範學校內日本幼稚園協會 堀七藏
發行者 東京市下谷區上根岸八十八番地 越元新吉
印刷者 東京市京橋區木挽町二ノ一三 石上文七郎
印刷所 教文書院印刷部

無禁斷轉載

發行所 教文書院
東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)
電話下谷三〇四七番・一九五一番
振替東京四六一一一番

茂木由子先生作歌
萩原英一先生作曲
土川五郎先生振付

律動遊戯 おさなごのうた

四六倍判箱入裝幀頗る美本
正價 金二圓五十錢 送料十七錢

目次

お日様
ピアノ
カケアク
ラ
凧
コケツコー

ピアノ伴奏付

茂木先生の歌に萩原先生の曲、遊戯界の第一人者たる土川先生の振付と、三先生の御盡力で今迄に無い理想的遊戯教本が出來ました、各々多數の寫眞版を入れて表情の變化を理解し易く巧みに現して有ります。

發兌

東京上野公園寛永寺坂下 上根岸八十八
振替東京四六一一番 電下三〇四七番

教文書院

第二十五卷第二號（毎月一回十五日發行）

大正十四年二月十日印刷
大正十四年二月十五日發行

定價金三十五錢

教文書院